

火でまつる夏

文 井戸 理恵子

火山大国・日本には、火を噴く山があらゆるこちらで眠っています。そんな火の山が噴火し、真っ赤に燃えたぎるマグマを泉のように噴き上げてみせるとき。荒ぶる自然の姿に恐れを感じることも、どこか浮き立つような気持ちで思い出される光景がないでしょうか。そう、闇夜を照らす、夏の火祭りの眺めです。

山の斜面に組んだ松の割木に点火して文字を浮き出させる京都の五山送り火は、その名の通り祖霊を送る伝統行事として広く知られますが、このような送り火の風習は迎え火が発展したものともいわれています。あの世からは炎の光でしかこの世が見えないとされてきましたから、時にあのくらい大がかりな演出が必要だったということでしょうか。

日本の夏祭りには、このように祖霊としての神を「火で迎え、火で送る」ものが多いのです。同じく京都で始まり、厄祓^{やくばち}いを目的とする夏祭りの原型になった祇園祭も、その例に連なるでしょう。祭りの前後で神輿を洗ったり仕舞ったりするときにかざす大松明^{おほたいまわ}や、前夜祭の宵山^{やま}で山鉦^{やまかね}を照らす大量の提灯、家の軒下に吊るされ幽^{かす}き光を放つ神灯などが、夜の町を情熱的に盛り立てます。

夏祭りとは火が分かちがたく結びついているのは、この季節の気候が病を呼び寄せやすいからでもあります。病の要因になる不浄と湿度を「湿邪^{しつじや}」と呼んで忌み嫌い、これを遠ざけ祓うためには、火が必要不可欠だったのです。あらゆるものを清め、浄化し、乾燥を促してくれる火が。

日本のニッポンの理

第一回

いどりえこ／民俗情報工学研究家。1964年、北海道生まれ。多摩美術大学非常勤講師。節句の会「アエノコト・節供の饗宴」をはじめ、伝統儀礼や風習の意味を民俗学的に解明し今に具現化する提案を行う。著書に『暦・しきたり・アエノコト 日本人が大切にしたいうつくしい暮らし』など。

祇園祭で配られる、茅^{ちがや}でつくられた粽^{ちまき}のかたちの三角形と護符の赤い色は、まさに火を象徴するものでしょう。そして、その護符に記される「蘇民将来^{そみんしょうらい}」の名は、祭りの由来と深い関わりがあります。牛頭天王^{ごず}（スサノヲ）が、旅の途中、疫病神の姿で現れて宿を希^{こいねが}つたところ、蘇民将来が快く受け入れてくれたことに感謝し、都を襲う災厄を避けるには「蘇民将来之子孫也」と書いた茅の護符を門に貼ればよい、と告げたことがもとになっていいます。以来、蘇民将来は厄病除けの守護神とされるようになりました。



今や全国津々浦々で開かれる夏の一大イベント・花火大会の発端もまた、江戸時代に流行^{はや}った疫病や飢饉の死者供養と未来の厄災除けを願うためにありました。今のような納涼の楽しみだけでなく、本来は死霊を慰め、悪霊を鎮める「火祭り」としての意味が色濃くなされてきたようです。

これから、七夕をはじめ、花火、中元、盂蘭盆会^{うらぼんえ}の迎え火や送り火……と、この世の人とあの世の人の饗宴、夏の供養の祭りがいたるところで開催されます。

火を象徴するといわれる三角形の粽に蘇民将来の名を記す護符がついた、八坂神社の粽。軒下に飾る。
写真／PIXTA